

平成25年度

第1回 富山高等専門学校 運営諮問会議

会 議 録

平成25年7月30日（火）

平成25年度 第1回 富山高等専門学校 運営諮問会議

日 時：平成25年7月30日（火）午前10時

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶
2. 出席者紹介
3. 議 事

[1] 富山高等専門学校年度計画について

「平成24年度 年度計画実施状況・平成25年度 年度計画」

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 教育に関する事項
 - (1)入学者の確保
 - (2)教育課程の編成等
 - (3)優れた教員の確保
 - (4)教育の質の向上及び改善のためのシステム
 - (5)学生支援・生活支援等
 - (6)教育環境の整備・活用
2. 研究に関する事項
3. 社会との連携，国際交流等に関する事項
4. 管理運営に関する事項
5. その他

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

III 予算（人件費の見積もりを含む，収支計画及び資金計画）

[2] その他

4. 閉会挨拶

岩 崎 紀美枝（学生課長）
柴 田 淳（総務課長補佐）
穴 田 さおり（総務課長補佐）
錦 織 掌（総務課主査）
清 水 由美子（総務課主査）

〔開会 午前9時55分〕

1. 開会挨拶

【林事務部長】 ただいまから、平成25年度第1回富山高等専門学校運営諮問会議を開催させていただきます。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます事務部長の林と申します。どうかよろしくお願いいたします。

開会に当たりまして、本校の石原校長からご挨拶を申し上げます。

【石原校長】 おはようございます。

本日はご多用な中、お集まりをいただきまして、どうもありがとうございます。

日ごろ私どもの教育・研究に何かとご支援いただいておりますことに、まず厚く御礼を申し上げたいと思います。

私ども、平成21年から平成25年までの第2期中期計画ということで計画を作って、その実行状況をチェックしております。本日はその件も含めまして、貴重なご意見をお寄せいただき、今後の計画の遂行に当たって取り込んでいきたいと願っております。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

2. 出席者紹介

【林事務部長】 本日もご出席いただいております委員の皆様方をご紹介させていただきます。

本会議の委員の任期は2年となっております、今年度から2年間ということでお願いさせていただきます。

今回、新たに5名の方に委員になっていただいておりますので、大変恐縮ですが、新たに委員になられた方には一言ご挨拶をお願いします。

まず、富山大学長 遠藤俊郎様。

【遠藤委員】 遠藤です。よろしくお願いいたします。

【林事務部長】 富山県立大学工学部長 松本三千人様。

【松本委員】 松本です。よろしくお願いいたします。

4月から県立大学工学部長をやっております。今回初めて参加させていただきますけれども、今、大学の方でも法人化に向けて中期計画などを立てている最中で、そういう意味では、今回の会議は我々にとっても非常に参考になると思っていますので、ぜひまたよろしく願いいたします。

【林事務部長】 富山県教育委員会県立学校課長 坪池 宏様の代理で、県立学校課高校教育係主幹 係長 今堀俊彦様。

坪池様も今回新たに委員になっておられますので、恐縮ですが、今堀様、ご挨拶をお願いします。

【今堀委員（代理）】 今堀です。よろしく願いいたします。

本来なら課長が出席すべきところですが、所用がありまして代理出席となりました。

教育委員会でも、現在、前期の再編がようやく終わりました、今年度、その効果などをいろいろ検証する予定にしておりますが、高専も射水と本郷の再編から何年かたっているかと思えますけれども、またその効果なども勉強させていただきたいと思えます。

それとあわせて、申し遅れましたが、教育委員会の事務に関しましては日ごろご協力いただいております、本当にありがとうございます。よろしく願いいたします。

【林事務部長】 富山県中学校長会会長 射水市大門中学校長 星野正義様。

星野様も今年度から委員でございます。

【星野委員】 中学校長会の星野と申します。

それこそ射水市の教育委員会教育次長をやっていた折とか、最近では射北中学校の校長をやっていたのですけれども、射水キャンパスの商船高専時代から本当にいろんな面で協力いただけていました。

小学校の方でも、外国語活動をやっていたとき、学生や先生方にも協力いただきました。

本郷キャンパスの方、昔は富山高専の方でも、地域貢献ということで中学校の出前講座などで協力いただいていたことに感謝申し上げます。

私はこの4月から校長会長を承っているわけですが、中学生の進路先ということで高等専門学校に向かっていく子もたくさんいますので、学生も楽しい学生生活を送っていると思います。今後ともまたよろしく願いしたいと思えます。

【林事務部長】 富山高等専門学校技術振興会会長 松田 登様。

【松田委員】 松田です。よろしく願いします。

【林事務部長】 一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事 本望隆司様。

本望様も新たに委員になっております。よろしくお願いいたします。

【本望委員】 本望です。よろしくお願いいたします。

私ども全日本船舶職員協会は商船高専の流れの中で今日あるわけですが、全国に5つ商船学科を持った高専がありまして、それら5つの学校の卒業生が参加する団体ということで、社団法人として現在活動しているところです。私自身は富山商船の出身です。よろしくお願いいたします。

【林事務部長】 公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長 金岡純二様。

【金岡委員】 金岡です。金融と経済のこと以外は一切分かりませんので、よろしくお願いいたします。

【林事務部長】 株式会社ユニゾーン代表取締役会長 梅田ひろ美様の代理で、執行役員 管理部長 浜屋 茂様。

【浜屋委員（代理）】 浜屋です。よろしくお願いいたします。

本来ならば梅田が出席すべきところ、所用がありまして私が代わりに出てまいりました。よろしくお願いいたします。

【林事務部長】 立山科学工業株式会社管理部人材開発グループグループマネージャー 正橋哲治様。

【正橋委員】 正橋です。よろしくお願いいたします。

【林事務部長】 富山高等専門学校本郷キャンパス同窓会会長 石山彰雄様。

石山様も本年度から委員をお願いしています。よろしくお願いいたします。

【石山委員】 同窓会の石山です。今年度からというか、前は商船の同窓会長が順番で任期だったということで今年度から委員です。私は富山高専の同窓会長をやって既に20年近くになります。何のために同窓会長をそんな長い間やっているのかについて、これからいろいろ発言していきたいと思えます。

【林事務部長】 皆様、どうもありがとうございました。

なお、富山県中小企業団体中央会会長 黒田輝夫様、富山商工会議所会頭 犬島伸一郎様はご都合によりご欠席です。

続きまして、この場に同席させていただいています本校の関係者を紹介させていただきます。

校長の石原です。

副校長の丁子教授です。

副校長の成瀬教授です。

教務主事（射水キャンパス）の新開教授です。

学生主事（本郷キャンパス）の青山教授です。

学生主事（射水キャンパス）の水谷教授です。

寮務主事（射水キャンパス）の水本教授です。

総務課長の広瀬です。

管理課長の竹山です。

学務課長の松梨です。

学生課長の岩崎です。

その他、総務課の事務職員が同席させていただいておりますので、よろしくお願いたします。

引き続きまして、配付資料の確認をさせていただきます。

（資料確認——記事省略）

【林事務部長】 本日の会議は12時まで協議をいただく予定にしています。その後、皆様方には1階の中会議室で昼食をとって懇談していただき、およそ13時に終了の予定にしています。

本日の議長につきましては、皆様方、今年度から新たに委員の任期ということで、新たに議長を選出する必要があります。規則では委員の互選となっておりますが、大変恐縮ですが、こちらから提案をさせていただきたいと思っております。

富山大学の遠藤学長に議長をお願いしたいと思っておりますが、皆様いかがでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

【林事務部長】 ありがとうございます。

それでは、遠藤学長に議事を進行させていただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

（遠藤議長 議長席へ移動）

【遠藤議長】 それではよろしくお願いたします。議長を務めさせていただきます。

3. 議 事

[1] 富山高等専門学校年度計画について

「平成24年度 年度計画実施状況・平成25年度 年度計画」

【遠藤議長】 早速議事に入らせていただきます。

本日の議題であります富山高等専門学校年度計画について、説明資料の事項ごとに、最初に平成24年度年度計画実施状況について説明した後、25年度の計画を説明していただくという形にしたいと存じます。これに続きまして意見を交わさせていただきます。よろしくをお願いします。

初めに、24年度の計画実施状況を踏まえて平成25年度の計画の概要についてということで、石原校長からお願いしたいと存じます。よろしくをお願いします。

【石原校長】 私から資料1の概要を簡単にご説明させていただきたいと思います。

個別の説明は後ほど担当者から詳細な説明をいたしますので、よろしくをお願いします。

4ページをご覧いただきたいと思います。

次第の議事の[1]にこれからご審議いただく内容が書かれています。

資料1の構造だけ最初にご説明しますと、富山高等専門学校の年度計画についてというのがあります。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲが大きな分類です。

Ⅰとして国民に対して提供するサービス云々というのがありまして、その中に、1、教育、2、研究、3、社会との連携、国際交流等、4、管理運営に関する事項、5、その他となっております。右側に資料1のページ番号が付してあります。

2の研究に関する事項が19ページ、3の社会との連携、国際交流等に関する事項が19ページ、4の管理運営に関する事項が21ページ、5のその他が23ページとあります。

資料1に関しましては通し番号がついていますので、そのページ数をご覧いただければと思います。

続きまして、Ⅱの業務運営の効率化に関する目標云々が23ページ、Ⅲの予算が23ページ。このような内容となっております。

それぞれの項目につきまして、後で説明者が随時説明することにしていきます。

基本的には、教育に関しては、グローバルな人材、イノベーションを生み出すような人材をいかにして確保するかが、これからの日本の社会を作っていくために非常に重要なことであるという認識のもとでこういった計画を今ご報告させていただき、それに対するご意見をいただくことをお願いしたいと思っております。

教育だけではなくて、そのバックボーンになる研究に関して私どもが大事だと思っていることもⅡにあります。高専そのものがこういった教育・研究をいろいろやっていくことは十分ではなくて、皆様方との連携のもとで実施していかなければいけないということで、

今私どもが取り組んでいる、特に国際交流や、地域の皆様方の、先ほどありました技術振興会とのかかわりについてのお話をさせていただきたいと思っております。

管理運営に関しましては、いかにして教員が仕事をしやすい環境を作っていくかが問われている。同時にモチベーションが上がるようなものを作っていくにはどうしたらいいのかということについての私どもの取組みを書かせていただいております。

あとは効率化ということで、年々文科省からの予算も縮減している状況の中、どのような方法があるのかということで、今私どもが取り組んでいるものを報告させていただきたいと思っております。

予算については、いずれもそうなのでしょうが、効率的に運用を図ることが必要であることはもちろんですが、それに対して私どもがどのように取り組んでいるかといった内容をここには盛り込んでいます。

そういったことで、本日は第2期中期計画の中の平成24年度に実施した状況、本年度25年度の計画についてご説明し、それについてご意見をお願いしたいと思っております。

資料はA3横長の非常にたくさん文字が書かれておりまして、非常に読みづらいと思えますけれども、どうぞよろしく願い申し上げます。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

まず最初に、教育に関する部分、「入学者の確保」から「教育環境の整備・活用」までご説明をいただいて皆様と議論をしたいと存じます。

「入学者の確保」の項目について、石原校長からよろしく願います。

【石原校長】 私からは「入学者の確保」ということで、資料1の11ページと12ページをご覧いただきたいと思います。

まず表の構成ですが、一番上の左側の欄が第2期中期計画、これは富山高等専門学校の第2期中期計画、平成21年から25年の間の計画です。その右隣に平成24年度の計画があります。真ん中に平成24年度の計画実施状況（事業の実施状況）があります。右側から2つ目の欄に平成24年度の実施状況を示す根拠資料が書いてあります。一番右側の欄に平成25年度の計画があります。

私からは、特に24年度の計画の実施状況と平成25年度の計画についてご紹介させていただきます。

まず「入学者の確保」ということで、計画の実施状況の右側の欄を見ていただきますと、

まず①というのがあります。いかにして優秀な中学生を本校に迎え入れるかということで、志願者対策室、広報戦略室が共同で県内にあります中学校を2回以上訪問して、そこで本校のPR等の資料を配布してまいりました。そこに①②③④と書いてありますような形で、プレスリリースも含めましていろいろ広報に努めてまいりました。24年度もやってまいりましたし、25年度も実施する予定です。

その下の段へ移っていただきまして、②です。上から3段目、平成24年度の方ですが、一番右側の欄を見ていただきますと、入学説明会、学校の見学会、公開講座、出前授業といった事業を積極的に行ってまいります。

②にありますように、WebサイトにQ&Aコーナーを設けまして、学生からの質問や保護者の意見を積極的に取り込むといったことをやってまいります。

③ですが、特に私どもは、女子学生や女性教員を採用することにこれから力を入れてまいりたいと思っております。女子学生の活動の様子、女子卒業生の活躍をホームページを通じて紹介し広報活動を行ってまいりたいと思っております。

平成24年度も実施状況は同じです。

一番下の段ですが、右側の欄に①②③とありますが、特に③にありますように、志願者対策用の動画コンテンツを本年の秋まで撮影し制作する予定にしております。

12ページ、裏面を見ていただきたいと思います。上の段の一番右側の①ですが、高専機構と連携いたしまして、他高専と共同した遠隔地での試験を行うということを現在やってまいっております。本年も実施する予定です。

その下に②として、中部日本海高専共同PRサイトというのがあります。富山高専や新潟県、石川県、福井県、京都府の国立高専が協力して実施しているものが中部日本海高専共同PRサイトです。そこへ参加、協力をし、ほかの高専と協力をいたしまして高専制度を広報活動するということを実施してまいります。

③は、本郷キャンパスと射水キャンパス統一の入試を実施しておりますが、昨年度の実施の反省を踏まえて改善に努めることを実施しているところです。

その下の段に①から⑥まで書いてありますが、先ほど申しましたように、①は統一の入試制度を実施する。これはキャンパス間の統一入試という意味です。それを実施して受験者の確保に努める。

その下にありますように、統一試験の結果を分析して、ある一定の基準の学力水準を維持するように対策を講じることを今年度実施してまいりますし、平成24年度についても基

本的にはこの方向で実施してまいっております。

私から「入学者確保について」の概要についてお話をさせていただきました。

どうぞご意見をいただければと思います。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

時間の関係もありますので、教育関係の資料のご説明を続けてもらって、議論はまとめてさせていただくような形でお願いします。

(2)の「教育課程の編成等」につきまして成瀬副校長からお願いします。

【成瀬副校長】 12ページ目、「教育課程の編成等」ということで、①②は、基本的に現在の新しい教育課程をいかに確実に定着させるか、専攻科も含めて特色のある教育方法を確立するかということで、いろいろ工夫をしております。

①の平成24年度の年度計画実施状況を見ていただきたいと思いますが、エコデザイン工学専攻というのは本郷キャンパスの専攻科ですが、外部の方々をお呼びして授業を行うということをやっております。

一番下の国際教育センターと連携してネイティブスピーカーを活用することにおきましても、例えばシンガポールのポリテクから先生をお呼びして異文化に関する授業を英語でやっていただくといったことを通しまして工夫しているところです。

②に書いてありますのは、現在、特に高専機構が中心になってやっておりますけれども、モデルコアカリキュラムというのがあります。これは全国の高専で最低限に学ぶことを統一しようというカリキュラムです。そういうものの周知を図りながら本校のカリキュラムを改善していったということで、今年度につきましても同様のことを継続してやっていきたいと思っています。

④ですが、外部からの評価、内部での相互評価ということで、FD委員会が中心になりまして、②ですが、教員相互のピアレビュー、授業参観をやって、特に今年度は両キャンパスの授業が見られるようにということも念頭に置きながら授業参観の機会を設けてやってきました。今年度も前期が一応終わりました、本日の午後の会議でピアレビューの結果について議論しようと考えております。

13ページにいきまして、⑤⑥ですが、スポーツ、文化、ボランティアに対して積極的に取り組まないといけないということですが、特に高専の場合、平成24年度の年度計画の方に書いてありますが、高専独自の体育大会、ロボットコンテスト(ロボコン)、英語プレゼンテーションコンテスト(プレコン)、プログラミングコンテスト(プロコン)に積

極的に参加することを昨年度も今年度も継続して行おうと思っています。

特に学生の数の面でいきますとやはり減っていきますので、一番下書いてあります学校の活力を上げ、中学生へアピールすることを目的とし、クラブ活動を活性化するという事で、キャンパス間のシャトルバスを出すなどの工夫を通して、さらに諸活動を盛り上げていきたいと思っております。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

続きまして、「優れた教員の確保」について。

【石原校長】 13ページ目の中ほどに黄色でマークがついておりますが、「優れた教員の確保」についてということです。

私どもは特に、これはどこでも同じでしょうが、若手の新しい人材を公募等で採用することと女性教員の比率を増やす方向で今考えております。

その中で、後ほど話がありますように、女子大学院生のインターンシップ等も今年度実施する予定にしております。

具体的なお話をさせていただきますと、13ページの一番右側の①ですが、公募制などにより博士の学位を有する者という形で、基本的には博士号を持っている人材を採る。

②③にありますように、多様な人材を採用して、いろいろ刺激を受けるような人材を確保したいということで、他機関や他高専との人事交流等も進めているところです。

その下の段にありますように、技術科学大学と連携しまして教員の交流制度も実施しているところです。

14ページ目をご覧いただきたいと思いますが、平成25年度の計画のところの文字が少ないようですので、そちらの方で説明させていただきます。

一番上の段、①ですが、女性スマイル・アップ推進委員会を中心にして女性教員の増加を進めるための環境整備を行っております。

女性教員に高専を理解してもらうための制度等を試行するという事で、先ほど申し上げましたように、女子大学院生を対象にしたインターンシップや講演会を開催することにしております。これはお手元に配付しております資料の中にもパンフレットがあります。

その下の段の①ですが、両キャンパス合同で企業等を利用したFD研修会を積極的に実施し、教員の能力向上を目指すということです。

また、②③④も継続して実施します。

その下の段のまず②ですが、FD委員会において教育業績や研究業績を持つ教員の講演を実施し、両キャンパスの教員が参加可能な研修会を引き続き開催する。

今年始めたことですが、特に③、教員のキャリアパス形成のために、各教員に、自分が教育、研究、地域貢献、学内管理にどのように取り組みたいかを所定のフォーマットに記入してそれを提出し、その達成に向けて努力していただくことを今年から始めております。

その下です。②ですが、教員の国際学会等への参加を積極的に推奨することをやっております。

同時に、今年から来年に向けて、富山高専が主体になりまして、外国の大学等と共同して研究シンポジウムを開催すると。そういったところで研究面でも力を入れていきたいと思っております。

「優れた教員の確保」については以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございました。

引き続きまして、「教員の質の向上及び改善のためのシステム」について、成瀬副校長、お願いします。

【成瀬副校長】 同じく14ページですが、新教育課程を着実に実施するということで、新課程になりましてから継続しておりますのが、①の工学系、人文社会系、商船系の3分野の融合を図るような取組みということで、具体的には、1年生の段階で全学生がいろんな分野を体験できるような授業や、技術者の倫理観を育成するための授業を融合した授業を取り入れております。

②ですけれども、本校の場合は実践的技術者養成の場ということで、いろいろな資格取得、工学教育のJABEEという審査を通して高めることをやっております。

①の場合は、ある程度の資格を有することも含めまして、外部資格を取った場合には単位認定できると定めております。新カリキュラムのもとでそういうことをやっていこうということです。

15ページ目ですが、中部日本海高専間との学校の枠を超えた学生の交流活動を推進するということで、幾つかの枠組みで活動しております。

例えば①にありますように、タイのキングモンクット工科大学からの学生を受け入れることを、本校だけではなく、例えば他高専も一緒になって受け入れ教育に当たるようなことをやっております。

CASTというものをやっておりますが、これは専攻科生に英語で研究論文を発表させ

てそれを学生に見せるということ、テレビ会議を使って他高専と連携してやるという取組みをやっております。

③ですが、商船学科は5商船あります。5商船が枠を超えて一緒に交流するというところで幾つかの事業を進めておりました、これまでも「ALL SHOUSEN学び改善プロジェクト」というものをしておりました。現在は「海事人材育成プロジェクト」も継続してやっており、教材づくりや講演会を通して商船学科の学生のスキルを上げる取組みをしております。

⑤ですが、大学評価・学位授与機構による認証評価に適合する教育課程とするということで、現在、幾つかの外部評価を受ける形になっております。自己点検評価委員会のもとで専門部会を作りまして現在、評価、改善を進めているところで、今年度も引き続き継続してやっていきたいと思っております。

16ページ目です。退職技術者を含む企業人材を活用した教育を積極的に進めるということで、現在、本校は、外部で本校に対して貢献をしていただいている方にシニアフェローとしてご活躍いただいております。現在、外国人も入れて33名おられますが、その方々に本校の本科、専攻科の授業等で指導、ご助言をいただいているということで、今後も引き続きシニアフェローの方々のご活躍をお願いしたいと思っております。

⑧ですが、長岡技科大が3年前から進めておりますアドバンスドコースというのがあります。これは長岡技科大と富山高専の共同で、例えば本校で授業を行う、長岡技科大で授業を行う。簡単に言えば、例えば長岡技科大へ編入学で進んだ学生は長岡技科大の卒業単位として認定できるといった制度ですが、そういうものを通してより優秀なエンジニアを育成しようというプログラムが現在動いております。今年度も引き続きそのカリキュラムに基づいてやっていこうということです。

⑨、インターネットを活用したeラーニングということで、現在もeラーニングシステムを導入し授業等で積極的に活用しておりますが、今後はさらにこの環境を進める必要があるかと思っております。今年度以降、それを心がけていきたいと思っております。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

引き続きまして、「学生支援・生活支援等」につきまして、丁子副校長、お願いします。

【丁子副校長】 「学生支援・生活支援等」と次の6番目の「教育環境の整備・活用」を続けてご説明させていただきたいと思っております。

資料の16ページからです。

「学生支援・生活支援等」ですけれども、最近、精神的にも身体的にも多様な学生が入学してきておりますので、こういった学生にどう対応しているかを説明しております。

射水キャンパス、本郷キャンパスで若干学生の気質も違うところもありますので、それぞれのキャンパスでそれぞれの学生に対応するような支援プログラムが動いております。

本郷キャンパスでは、「KOSEN C a f e」というもので学生相談室の範囲を超えた学生の支援を行っておりますし、射水キャンパスでは学生同士の交流、個々のリフレッシュを目的に「何でも相談室」というものを設けております。

高専機構のカウンセリングサービスもあります。

特に多様な学生に対応するというので、特別支援教育室を設置して、いろんな障害を持つ学生への支援体制も整備しているところです。

東海北陸地区の高専が協力をして意見交換や情報交換をするということを今年度から始めている。ホームページも充実したことに対して、学生や保護者に対する情報を広く提供することも25年度から新規に行っているところです。

17ページにいきまして、図書館も一つの情報を提供する場所だということで、情報センターと図書館を融合した図書館情報センターというものを設けております。旧来の図書館はいずれも老朽化してきたということで、24年度に射水キャンパス、25年度に本郷キャンパスの図書館の改修が行われることになっております。そういった図書館を活用したいろんな学生支援もやっております。

学生の寮の食堂も、効率化を図るという面で、両キャンパス同一業者に委託するというのでやっております。

今年度始めたことは、先ほどの改修した図書館情報センターで学生に活用を深めてもらうような施策をいろいろ行っております。

学生の授業料等の支援、これは古くからやっておりますけれども、できるだけ分かりやすく保護者の方々にも知っていただくような情報提供を引き続き行っております。

近年はキャリア支援ということも言われております。富山高専としては、進路指導室等を整備しまして、技術振興会会員企業様にもいろいろご協力いただきながら、学生のキャリアの支援をいろんな形でやっております。

以上が「学生支援・生活支援等」です。

次の「教育環境の整備・活用」ですが、これは主に施設整備をして、できるだけ学生の

教育環境を整備していこうということですが、予算が絡むことですので、計画的に機構本部に要求する形でマスタープランづくりを引き続きやっております。計画的に限られた予算の中で整備していこうということです。

特に昨年度の補正予算の関係で、かなり大型の設備が入っております。これも、長年マスタープランを作ってきたものに基づいて、基本的にはその例に従って整備をしているところです。

もちろん耐震対策もやっておりますけれども、耐震対策は大体完了したのではないかと思っております。

18ページに行きますと、環境関係、学校もいろいろと地域の社会に対して環境に関する取組みをしっかりとやっているということで、両キャンパスを1事業所として昨年度エコアクション21の認証を受けたところです。それを継続的に続けていこうということです。

エコアクションのときには環境内部監査が重要ですが、ここには学生委員会の学生にも協力してもらって監査をしているところです。

その他いろいろと、現代社会に対応する学生を育成するというので、ハラスメントの問題、危機管理に関する問題、薬物乱用など諸問題があります。こういったものの講習会を行うなどしております。

実習工場では非常にパワーを持った大型の機械を扱う、あるいは化学薬品を扱うということもあります。安全教育にも力を入れております。

教職員のメンタルの問題もあります。いろいろとそういうものに対応しているところです。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

教育関係に関しましてご説明をいただきました。

各項目についてご意見あるいはご質疑等おありと存じます。

先にそれぞれの項目で口火を切っていただくという形で、それぞれの委員の方々にご発言をお願いしております。それに従いましてご指名させていただきますので、ご意見、ご質問等、よろしくお願ひしたいと思います。

初めに「入学者の確保」につきまして、星野委員からよろしくお願ひいたします。

【星野委員】 戦略と言えいいのか、実施状況の報告や年度計画を見せていただいて、本当に高等専門学校の取組みがこれを見たらよく分かるなといつも感じながら見ておりま

す。

それこそ中学校でやるといったらなかなか難しいなと思いつつ、中学校教育においてもこのようなことを考えてやっていかなければならないなと。この10分の1、100分の1、少しでも進められたらいいなと思いつつお話を今聞いておりました。

中学校から高等専門学校への入学者については、受験希望の子を見ていましたら、少し増えてきているかなと私の感覚では思っています。

受けようかなと思う子についても、やはり将来の目標をしっかりと持っているのかなという思いは感じています。

1つは願書や調査票、当然、受けるときにいろいろ担任が話をするのですけれども、やはり将来どうするのかとか、高等学校の場合は3年後、高専を希望している子については5年後、中には3年後の子もいますけれども、将来どうしたいのかという考えをしっかりと持っている子が多いかなと思いつつ見えています。

中学校の方でも今悩んでいるのですが、個人的に悩んでいるだけかもしれませんが、企業はどんな人物を期待しているのかなと。どんな人物というのは、例えば学習の成績が優秀なのか、人物として優秀なのか。よく「いい子をもらえたらいいですね」といろんな高等学校、高専、私立学校も言われるのですが、「いい子」という言葉を聞いたときいつも抵抗があるのですが、何のいい子なのだろうかなと。成績だけよくても、何かチームを組むといったらいつも一人浮いてしまう。果たしてそういう人物がいいのか、それとも1つ長けたものがあるのか。

中学校においては就職というのもあまりないので、企業の社長さん方とあまりしゃべる機会がないのですが、ただ、14歳の挑戦で地元を回ったときには、いろんなアドバイスとか、こんな人間になってくれたらいいなというのを聞くのですけれども、果たして本当に世の中としてどんな人物を養成していけばいいのか、中学校教育としてもまた感じるところがあるのですが、今お話を聞いたら、こういう人物にしたいというのがこの資料を見てよく感じさせられました。

中学校の方で今心配しているのは、発達障害を抱えた子どもたちをどういう進路に向かわせればいいのかという点です。最近すごく増えてきているわけですが、高等学校へ行って大人になるのか、少し薬が効く場合もあって、落ち着いていると聞いたらうれしいのですが、中学校2年生前後は難しいところがあるかなという思いは持ちながらも、中学校としても支援体制、当然、市教委あるいは県教委と話をしながらいろんな支援をいただいて

いるわけです。その支援体制の話も先ほどありまして大変うれしく思っています。

この会議とは関係ないかもしれませんが、願書や調査票を書くときに、県立学校と様式が違うので、大変な思いをしながらいつも担任の方は書いてチェックしています。私は富山県内しか分からず、ほかの県の調査票は見たことがありませんけれども、もし可能なら、調査票も県立学校のものを見比べていただいて、少しでも簡略化できたらいいなということを申し上げます。また入学者の確保ということで、それぞれの学校が少しでもいい人材をとっておられるのですが、併願となったときに、ちょうど県立学校と高専の受験が重なっていてどうしようかと迷う子がいたときに、学校としてはなかなか時間が取れないこともあったり、トラブルも往々にして幾つか起きたりしていますので、もう少し日程的なことも考慮していただいたらありがたいなと思っております。

先ほども少し言いましたけれども、商船高専でいろいろお世話いただいて、今またこういう会に出させていただいたわけですが、学校運営については中学校の方も少しでも参考にしたいなと思って聞いておりました。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

幾つか重要なことをおっしゃられたと思います。

なかなか難しい課題もありましたけれども高専側で何かありますか。

願書の記載の仕方と併願の日程調整みたいなことをもう少しできないでしょうかというご要望だったと思います。

【新開教務主事】 県立高校と本校の調査票がちょっと違っているというご意見については、調べましてから少し検討させて下さい。

それと、併願のため、今年入学した学生は、県立高校受験との日程が大変短くて、いろいろと中学校の先生方にもご迷惑をおかけしたと思うのですがけれども、高専の受験日は機構の方で統一日程に決まっております、こちらとしてはなかなか調整が難しいのが現状です。今年度に関してはちょっとだけ余裕があると思います。これも各高専で自由がきかないものですから、お許しをいただくしかないかと存じます。なるべくご迷惑をかけないようにしたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

【遠藤議長】 ほかの点に関して何かコメントはありますか。

【石原校長】 併願制の件でお話がありましたが、33ページ目を見ていただきたいと思えます。富山高専は併願制が今年で2年目です。この表の一番下の段の今年25年度の実績を

見ていただくとお分かりですが、定員が240名で志願者数が744ありました。受験者数731。その中で合格者数416を出したのですが、志願倍率は3.1倍、入学者が228でした。ですから、定員を実は割ったんですね。志願倍率が3.1倍あったにもかかわらず定員を割った。

これは今お話がありましたように、県立高校に入学されたいのか、富山高専に入学されたいのか、どちらに行くのかという判断ができなかったということで定員を割ってしまいました。そのことが私どもとしても非常に大きな問題となっております、その辺、事前にどこへ行かされたいのかはつきり分かれば私どもとしてもありがたいということで、何らかの工夫ができればいいなと思ってお聞きしておりました。

人材に関しましてはなかなか難しい部分があると思うのですが、社会全体として動いている部分がありますので、全部が全部、例えばグローバル的に活躍できるとか、リーダーシップをとれるとか、コミュニケーション能力が優れていると言った方々ばかりいると社会が成り立たない部分も出てまいりますので、あるグループの中での責任というか、自分の仕事がおのずと分類されていくのだらうと思っております。

しかし、その上でなおかつ申し上げますと、やはりこれからは、知識をたくさん持っていることももちろんそうですが、例えばその知識をいかにして組み合わせる別のものを作り上げていくとか、そういったものは非常に大事だと思っております、そのためにはやはり小さなもの見方だけではなくて、別な視点で見るとか、上から眺めてみるといったことを、これは教育でどこまでできるか分かりませんが、それが我々が生きていく間に獲得していく能力で重要なものだらうと認識しております。

学校の役目は、それをいかにして手助けできるか、その導入部分をいかにしてきっかけを与えられるかというその辺だらうと思っております。そのための工夫はいろいろしております。

【遠藤議長】 分かりました。

先ほど星野委員がおっしゃった、いい子とは何かというのは、お昼のときの委員のディスカッションに期待させていただきたいと存じますが、高専の希望者がトータルとして増えている。ただ最終的に、石原校長が言われた併願の難しさとかいろんなことがあると思います。もしかしたらもっと合格者を増やせたかもしれないし、高専に来てもらえる人がいたかもしれないけれど、というずれが生じたことについてはまたご検討いただくとして、日程上の問題もあることは理解いたしました。

先ほど、将来への希望を明確に持って高専を希望している学生が増えてきているような

気がするといいますか、そういうことが感じられるとおっしゃいましたけれども、この辺はどのようなことですか。これは大事だと思うのですけれども。

【星野委員】 1つは、例えば兄弟が誰か高専へ行くでしょう。弟、妹もその動きを見ていたら、やはり行こうかなという感じで、ある家族はそういう状況がありました。

その話を聞きながら、中学校の方でも先輩から学ぶということで、卒業生を何人か呼んでやるのですが、工業系、商業系、普通科系、高専へ行っている子も呼んだりする。その話を聞いたときに行ってみようかなと希望する。

ただ何となく普通科といったら、まだ将来の姿が見えないですね。普通科は普通科でも、どのコース、工業系か商業系か、会社員といってもどんな関係の会社員なのか、そこまで追求したら中学生は「えっ？」という感じなのです。そうではなくて、自分は親の職業を見習って希望の学校へ行きたいというのもあれば、私みたいに、父親が売薬だったのですが、絶対跡を継がないという選択をする子もいる。ある程度将来が見えている子というのは、進路を選ぶとき、それが例えば高校とかは、名前が違っていてもそのルートへ行く。やはり自分の進路についてしっかりしている子の方が高専を選ぶという感じなのですが、特に私個人的には、今の中学校にずっといまして、今の生徒の親が私が担任していた子どもたちなのですが、やはり「何で高専選んだが？」という会話をしたときに、「将来こんな道へ行きたい」という回答が多かったような気がします。

【遠藤議長】 大事なことだと思うんですね。今はどちらかというと先行きが見えないので、みんな先延ばしばかりして、大学生になっても何をやりたいのか分からない、入ってから考えて悩んでいるというのが結構多いです。そんな学生ばかりではないと思いますが、これは非常に大きなテーマなのですが、ちょっと時間がなくなりますので、一回ここで切らせていただいて、次の「教育課程の編成等」について今堀委員からご発言をお願いします。

【今堀委員（代理）】 「教育課程の編成等」で挙げられている内容を見せていただいて、高校が抱えていることと結構共通する部分というか、同じようなことが多いのだなど。それに対する対応も非常にきめ細かにやっておられまして、そういった一つ一つのきめ細かい対応がポイントになっているのかなと感じました。

具体的な内容を2、3挙げさせていただきますと、まず到達度試験の話が出ていたかと思うのですが、高校でも現在結構問題になっているのが、中学校の内容が十分身につけていない生徒の入学、そういうものに対して「学び直し」ということが新しい学習指導要領

の中では言われるようになってきております。

高専の場合、中学校段階の部分が全然身につけていない生徒は少ないだろうと思いますが、ある程度到達目標を設定して、その到達目標に達成していない者に対してどのように対応していくのかを伺いたい。

例えば高校ですと、各学校で学び直し教材といいますか、そういう専用の教材あるいは専用の学校設定科目を作って対応していくという工夫を現在始めているところです。

資料の37ページ、38ページの試験実施状況を見せていただきますと、キャンパスごとに特徴があるのかなとは思いますが、全国平均に対してちょっと少ない、到達していない生徒に対してどのように対応していくのか、そういう者に対してどういうことをやれるのかという観点をどうしていくのかなと思いました。

グローバル人材の育成というお話もあったかと思いますが、これも現在国の方でいろいろ出ていまして、新しい学習指導要領では、高校の場合は英語の授業は原則英語ということで、現在教員研修をやって、中学校の段階からちょっとずつそのような形でやっているところです。

今後、そういう形で学んだ子どもたちが入学してくる。当然、全て英語でやっているわけではありませんが、原則英語でやる。例えばネイティブスピーカーを活用した授業とかそういう工夫をしておられる中で、教員の側もどのように対応していくのか、そこら辺もどのようにっていくのかなと思いました。

教員相互のピアレビューや学生による授業評価ということも出ておりましたが、資料を見させていただきましたら、大体41ページから後なのだろうと思いますが、学生による評価は、試験の内容についての評価がどの学科も結構高いのだなと。それに対して家庭学習がどの学科も低いように見えました。

高校でも家へ帰ってしっかり学習させるかが結構問題になっているところですが、高校の生徒の中には、何を勉強すればいいか分からないとか、どのようにやればいいのか分からないという生徒が結構多いわけです。そのときは、これをやりなさいとかこういう形だと決まり切った形をしっかりと教えるということを結構やっているわけですが、寮生も多いというお話だったので、そういった、言ってみれば一種の生活指導の側面にもなってくるのかなと思うのですが、生活指導なども含めたトータルな学習指導という観点が必要になってくるのかなと思いました。

スポーツのコンテストなどいわゆる部活動ですが、高校の場合も現在、再編の途中なも

ので、小規模校が結構ありましてなかなか部活動を維持するのが大変な学校もあるところ
です。

なかなかいい決定打がなくて、高校の場合ですと全員部活動制という形で対応している
ところですが、それぞれの学校の違いがあると思いますので、少人数の部活動に対しての
これといった決定打はなかなかないところです。課外活動やコンテストでの実績というの
は学校の活性化にもつながりますし、中学生に対してのアピールが全然違いますので、ぜ
ひ頑張って維持していただければなと思います。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

これについて何かお答えはありますか。

【成瀬副校長】 まず到達度試験につきましては、ご指摘のとおり学力が不足している学
生もいますし、学科によって大分違いがあります。

教務関係としては、基本的にはまず補講という形で対応しております。そのために、外
部講師も活用しながらということになろうかと思います。これは、先ほど言われました学
び直し教材までいくといいと思って、逆に教えていただければと感じた次第です。

グローバル人材の方でいきますと、高校のように原則英語というところまではまだ踏み
込んでいませんが、できるだけネイティブの方の授業を入れることや、外部試験でいきま
すと英検、TOEICを強制的に課して勉強させるということをやっています。

射水キャンパスの方でいきますと、パーマネントといいますか非常勤ではない常勤のネ
イティブの教員が2名おります。そういう先生を担任にして、教室の中では全部英語でや
って下さいという形で活躍してもらっているところがあります。

家庭学習等につきましては頭の痛いところで、高専の場合は特に実験もありますので、
こういうところでじっくりと、家庭でといいますか寮も含めましてレポートを作るという
ところは徹底していると思いますが、英語や数学につきましては、現状は課題を与えて各
先生がチェックするといった対応をしているところです。

【遠藤議長】 部活動は積極的に進めたいと皆さん思っていらっしゃると思いますけれど
も、さまざまな課題があるなということだと存じます。

続きまして、「優れた教員の確保」につきまして松本委員からお願いいたします。

【松本委員】 それでは、「優れた教員の確保」のところで、いろんな施策をやられて、細
かに多様な人材の育成をされているのだなと思いました。

何点か質問と、教えていただきたい部分があります。

1つは、優れた教育・研究力を有する人材を確保するという案ですが、そういう人材とはどういう人材なのか私もよく分からなくて、そういう人材は我々も欲しいなと公募するときに思うのですが、学位を持っているとか企業で実績があるという形で評価できるのかなというか、特に高専のようなところだと、入学してきた学生から専攻科の学生も含めて結構幅が広いんですね。そういったところを担当するというか、いろいろ教えていけるといふか、研究、教育を含めてやれるところ、そういった教育力や研究力をうまく持った人、なかなか見分けるというか兼ね備えた人はそんなに多くないかなと。教育力や研究力、それぞれに優れた人はおられると思うのですが、そういったことを含めて、採用されるときにどういった形で考えていくのか1つ教えていただければと思います。

それと、先生方の多様な人材の育成ということでいろんなことをやられていて、人事交流みたいな形で他大学とかいろんなところに派遣をされて、長期間派遣されるケースもあると書いてありますけれども、そうしたときに、その先生が抜けた穴というか、教育をするというか、その部分はどのような形で埋めていくのだろうかなど。

我々の大学でも、できたら先生には長期間研修とかに行ってもらいたいものだけれども、そうすると周りの先生の負担が増えるのでなかなか難しいところがある。

この辺どうされているのかなというのが1つと、女性教員の比率を上げたいということとでいろいろやられている。非常に素晴らしいと思うのですが、男女共同参画の場合というのは、どちらかという、女性の比率を何%確保するとか、どうも数字がひとり歩きしているようなところがあって、こちらの学校の場合には、女性教員の比率はどういう状態でどのような形で上げていこうとされているのか教えていただければと思います。

新任の先生の育成で、メンター制度を導入されていると書いてあったのですが、それは具体的にどのような方がどのようなチームを作ってやられているのかというのを少し教えていただければと。素晴らしい試みだと思いますので、その辺はできたら我々も参考にしたいなという気がします。

教員のキャリアパス形成のために、ポートフォリオを作成して教員の評価指標を確立していくと書かれているところがあったかと思いますが、これは最終的にどのような形で活用していこうとされているのか。例えばそれを教員の評価に使う中で、例えば研究費や給与にフィードバックするような話まで考えておられるのか、その辺を少し教えていただければありがたいなと思います。

【遠藤議長】 「教育の質の向上及び改善のためのシステム」も一緒でよろしいですね。

【松本委員】 はい。

教育の質の向上、改善という形でいろいろやられていると思いますが、実際に改善すべき課題があって、それをどう改善していったって、どういうアクションをとって、その結果どうなったか、そういう教育の改革、改善に向けたP D C Aというのはどういう形で回しているのかなど。その仕組みというのは何か作られているのかなど。仕組みが非常に重要かと思うんですね。

教育の改革、改善をやろうとしたときに、常にそういうサイクルを回して改善していくことが求められると思うのですが、そういった仕組みとしてどういう形で考えられているのか教えていただきたいなど。そういうところがちゃんと詰められていないといけないのかなど思っております。

この部分には関係ないのかもしれませんが、実際に教育の中で学生の自主性や意欲、これは大学の方でも非常に問題になっているのですけれども、そういう自主性や意欲を発現させるような取組みというか、これももしかしたら教育の改善、改革につながるのかもしれませんが、そういったところはどういう形でやられているか、やろうとされているか教えていただければありがたいなと思います。

私からは以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

石原先生、お願いします。

【石原校長】 1点目の採用は実は私どもも悩む点です。なかなかそういういい人材がない。基本的には博士号取得という要件で、それは今なくても任期つきで採用して、3年以内を取っていく。修士段階で優秀な人材がいれば、それを高専の教員として採用したいと考えます。

女子学生の採用もそれと同じことでして、特に一般教養の場合は博士号までは要求しておりませんので、修士の学生で優秀な興味を持つ先生がおられたら、積極的にそれを採用する方向で検討しております。

いかに育てていくかというのは、やはり中でいかに処遇、頑張った分を報いてあげるかということにつながるし、ある意味では環境をいかにして整備してあげるかというその辺が大事だと思っております。

2点目の人事交流については、いろいろやろうとしておりますけれども、基本的には抜

けた後は残った人たちが当たることにしている。たまたま私どもの方は4学科体制だったものを3学科に縮小したのですが、教員の数自身は減らしておりませんので、その辺は少し余裕がある。ただ、今のうちに次の将来構想等を含めて考えていかないと、その分吸い上げられる可能性もあるという危機感を持っております。

3点目の女性の教員については、今16～17%が女性教員ですが、もう少し増やしたいということもありまして、新しく採用する人の2割、20%を目標にしています。一般教養あるいは専門の先生も含めて、できれば修士の方でも、活発、意欲のある方を採用して学位を取っていただくようにしてもらえばいいと思っております。

メンター制度については後でお話しすることにして、ポートフォリオについてのご質問がありました。特にこれをいろんな評価に用いようという気持ちはありません。私が教員の面談のときにいろいろ使わせていただいて、できる限り自発的に、自分をもう少し向上させることを意識してもらうために書いていただいているものです。

【成瀬副校長】 メンター制度について簡単に説明します。

採用されてすぐ一人の先生としてやっていくということで、職員室も何もないわけですので、学科の中で、偉い先生ではなくて、大体年齢が近いとか話しやすい人をメンターの先生として指定しまして、いろんなことを相談して下さいという形でメンターを新任の先生に対して必ずつけるという制度です。

【松本委員】 割と年が近い先生をつけるのですね。

【成瀬副校長】 そうですね。お伺いを立てるような感じではなくて、いろいろ相談ができるような先生をメンターとしてお願いしています。

P D C Aの話につきましては、自己点検評価委員会というのがありますので、そこで年何回かまず評価をして、改善事項を明らかにして、しばらくして改善したことを報告して評価してということを必ずやりながらサイクルを回しているところです。

以上です。

【丁子副校長】 最後の学生の自主性、意欲をどう持たせるか、これはカリキュラムの中にP B Lを設けたり、学科を少し融合したような形で、学生にいろんな意見を言わせて実行させるというカリキュラムを持っています。そこで学生の自主性などが育成されるのではないかと考えております。

【遠藤議長】 1点だけ。優れた人材を確保するという視点においては、どうやって選ぶかという選考方法が1つ大きいと思うんですね。教員の採用のとき、どういう形で、どの

単位で、どういう仕組みでやっていらっしゃるかということで、例えば高専は全国一律の機構ですので、その点に関しての選考基準と申しますか、一定のものがどのような形になっているのか教えていただければと思います。

【石原校長】 高専の機構で一律に決めているものではなく、各高専ごとに決めておりますが、私どもの方は、選考委員長は今年から私、校長になることにしまして、あと副校長が入って、校長が選定する複数の教員と他キャンパスの、例えば本郷キャンパスで採用する人事であれば射水キャンパスからも最低1人は入るとか、そういった形で構成しております。

どういう基準で選ぶかは具体的には申し上げられませんが。

【遠藤議長】 大事なことだと思います。一言で申しますと、全校で一律に人事を決めているという判断ですよ。まさにそこが今大学でも問われています。退職教員が増える中、新任の方をどう採るか。高専と立場は違いますけれども、どのフィールドのどういう新たな人材をどう採っていくか。それは大学の将来像も決めるという話で、学長が全部決めるという無理も言われているのですけれども、高専の方は、全校としての1つのビジョンを持ちながら決められているということだと思います。

【石原校長】 将来構想を考えております。

【遠藤議長】 承知いたしました。石原校長ありがとうございます。

松本委員からいろいろ質問をいただきまして、ありがとうございます。

続きまして、松田委員と石山委員から「学生支援・生活支援等」についてのご意見をいただきたいと思います。

松田様からお願いします。

【松田委員】 私の会社は、いわば電子部品の末端の製造をやっている会社です。そういったところで最近入ってくる学生を見ておりましたら、なかなか優秀な人もいらっしゃるのですが、その反面、非常に気弱な方もままおられます。高専出身の方も中には見られません。

そういったことで、ぜひ心のケアをもっとしっかり、本当は家庭なのでしょうけれども、もう少し強い子どもを育てることはできないものかと思っております。

そういった中で、ピアサポーターと申しまししょうか、専攻科の生徒あるいは上級学生が相談の聞き役や助言者となって、学習面の疑問や問題点を抱える学生の学習環境における質の向上を図っておられると。あるいは、学生会執行部と学生委員会懇談会を実施して今

後の学生支援に活用していくということがありまして、これは大変結構なことだろうと思っています。ぜひこれを一步深めていただいて、強い子どもを育てていただけないかなと思っています。

先ほど星野委員からちょっとありましたけれども、会社を経営しておりますと、どうしても品数、ローコストを主に目指すのですが、それよりもまずスピードと技術開発力が企業には必要になってきます。我々はバリューエンジニアリングという手法を用いて今会社の構造を変えようとしているわけですが、その中で、ただ一人優秀な人がいてもなかなか成果に結びついていかない。

ある試験があるのですけれども、まず3分間で「さんずい」の漢字を書いてみなさいと言われました。3分間で書いてみましたら、大体多い人で50ぐらい書けた人がいました。しかしながら、3人でやった場合にはそれが100を超えていったというように、やはり一人だけの力ではどうしようもない。

したがって、文殊の知恵ではありませんけれども、そのような団結力といいますかコミュニケーション能力を企業は求めております。ですから、そういった企業の実態に合わせて、それにながうような人材を育てていただきたいなと思っております。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

先ほどのどういう子を育てるかというところにもつながっているお話だと思います。

石山委員からいかがでしょうか。

【石山委員】 私からは特に言うことはないのですけれども、昔はこんなご丁寧なことをやっていたわけではないですよ。放任状態だった。しかし、こんなに細かいことを今やらなければいけないという状況になりまして、これは大変な話だと思います。

高専の先生というのは、教育もしなければいけない、研究もしなければいけないということで、一番過労死の多い職業だと言われているみたいですので気をつけていただきたいと思います。ところで宿舎や学校には冷房施設は全部入っていますか。入っていないところもあるのですか。その辺のところは、単純に、自分のところの家には大体冷房が入っているけれども、学校へ行ったら冷房がないと言われる方も中にはあると思いますので、今の時代では冷房はちゃんと入れていただくことが必要かと考えます。

高専で重要なのは、授業料の免除や奨学金の制度の積極的活用をやっていただかなければいけないと思います。高専に入学してくる生徒というのは割と低所得者の方が多い。僕

らのときもそうでしたけれども、あまりお金のない方々が入ってくる可能性が結構ありまして、そういう制度をしっかりと利用していかないと修学できないという方もおられますので、その辺の周知をしっかりとさせていただいて、制度利用に問題がないようにやっていただきたいと思います。

基本的には優秀な学生をいかに育てていくかという話になるのだらうと思いますが、一番目には、入学者をある程度確保するということがありますけれども、優秀な生徒をしっかりと確保することが重要なのだらうと思います。誰でもいいからとにかく定員だけ守ればいいという話ではなくて、いかに優秀な生徒を中学から吸い上げてきて、5年間で最終的には大学と同じレベルに育てなければいけない。これは非常に難しい話で、それなりのレベルの人でないといけない可能性が大なわけですので、その辺をいかに徹底するかという話です。

中学生や中学校は高専をどういう位置づけで見ているかという話をよく考えてもらいたいと思うのですが、ちまたで言われるのは、高専というのは高等専門学校なのですが、どこの専門学校かという話になってしまう可能性がある。その辺を誤解の無いよう説明して、卒業するときには絶対大学卒業生に負けないようなレベルまで持ち上げていく、これが先生方の考え方でなければいけないわけですし、高専というのはそうでなければいけないだらうと思う。

ただ、実社会がどこまでどういう人を要望しているかということは多少不明なところですが、その辺のところを精査していろいろ考えていかなければいけないわけです。高等専門学校という形でありながら、最終的に卒業するときには工学部卒業生と同じようなレベルに達することをやらなければいけない。非常に難しいと思われかもしれませんが、だからこそ、高専をどのように理解してもらおうかということをしっかりやっていかなければいけないと思います。

学生支援の話ではありませんけれども、入学を選抜から併願にしたということですが、人数の関係でいくと、40名というのは割と中途半端なんだと思います。多くもないけど少なくもない。もうちょっと少数制にして、それなりに目配りができる状況にして、今年の本郷キャンパスでは30何名ぐらいしかとれませんでしたが、それくらいにするとかなり目が届く可能性があるわけで、もうちょっと定員を少なくして少数制でやっていくやり方もあるかと思います。

ただ、国の考え方として、40人という定員を守らなければいけないという話になるかも

しれない。だから、制度設計をどうするかという話が大きな問題としてあります。それは富山高専だけの問題ではなくて、高専制度をどうするかということも含めていろいろやっ
ていかなければいけないと思います。

世の中の方々にしてみれば、高専というのは分かりにくい存在の可能性があります。こ
こにおられる人たちはみんな高専のことを理解されていますけれども、入ってくる中学生
の保護者の方たちは高専を全然理解されていないこともある。そこのところをどのように
理解させていくかをしっかり考えていかないと、高専制度が今後なかなか難しくなるとい
う気がするので、十分考えていただきたいと思います。

ちょっと関係ない話をしてしまいました。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

まさに同窓生としてのご指摘の部分があると思います。

具体のお答えはなかなか難しいと思いますけれども、学校側、今のお二人のご指摘を踏
まえてということでもよろしいでしょうか。それぞれ強力な応援団ですので、ご意見をいた
だきながらご検討していただきたいということで、お二人、よろしいでしょうか。この点
だけははっきりさせておきたいということはありませんか。

制度全体を考えることは継続的な大事なことだと思います。ただ、前から私は思ってい
ますけれども、高専に対する評価は、今、日本の社会の中で、経済環境あるいは世界環境
が新しく変わっている中で、国家レベルでは非常に高くなってきています。それは追い風
だと思いますので、より明確な形で高専の存在意義、そしてレベルアップを図るいいタイ
ミングだと思います。そのように理解しています。

ということで、最後の「教育環境の整備・活用」につきまして本望委員から願いま
す。

【本望委員】 時間もないので簡単に言わせていただきますが、設備関係のところを読ま
せていただきますと、全くそのとおりと感じます。安全、省エネ、健康等に配慮した設備
改善という方向で進められるということは非常によろしいことだと思います。

1点だけ、18ページの第2期中期計画の中に、当初の計画には練習船「若潮丸」の積極
的活用ということが書かれておるわけですが、実施状況という中にはこれが記載されてい
ないわけです。けれども、船を動かすことは大変なことで、燃料代だけでもばかになりま
せん。非常に難しいことであることはよく分かるのですが、私などは、いろんな援助とい
いますか寄附を活用しながら動かせるようなことを考えたらいかがかないと思います。

例えば地方治体のイベントとして湾内クルーズをやっていただいて、そこへ出して、支援をいただきながら参加するようなことをすれば、さらにそういうイベントで一般の人も見に来ていただければ、富山高専の宣伝にも効果があるのではないかという意味で、そのようなことを検討されたらいかがかなというのが私の提案です。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

貴重なご提案だと存じますので、ぜひご検討いただきたいと存じます。

それでは、次のテーマの2、「研究に関する事項」についてご説明し意見交換にまいりたいと思います。

石原校長、お願いします。

【石原校長】 19ページ目をご覧いただきたいと思いますが、まず左上の①、研究活動を促進し、その成果を教育に反映させるということで、そのためには科研費等の競争的資金の獲得をもう少し増やしたいということです。

その結果、この資料の73～75ページにありますように、本年度は科研費については、件数としては4番目でしたけれども、金額的には全国の高専の中では3番目になっているという状況です。

これをさらに増やさないといけないと考えております。具体的に言いますと、予算にもかわる話ですが、教育研究絡みの予算がどんどん縮減されております。教員1人当たりの使用できる金額がどんどん減ってきていて、10万～20万円程度のレベルに落ち込んでいくということです。これは外部資金を稼ぐしか方法はないと考えております。

あとは、②にありますような形で進めています。

③ですが、技科大はもちろんです、国際交流も含めて、こういった研究面でお互い教員も刺激を受けながら研究を進めていくことが大事である。近場の大学、コンソーシアム富山にある大学等も含めて、こういったことをさらに進めていきたいと考えているところです。

【遠藤議長】 分かりました。

それぞれにご努力されて高い結果、成果を出されていると存じます。

この点に関しましては金岡委員からいかがでしょうか。なかなか範囲が広いので難しい点だと思いますが。

【金岡委員】 私が意見を申し上げられるかどうか、これはなかなか難しいところですが、

いただきました資料の「研究に関する事項」、19ページからですが、これを読ませていただきました。

キーワードが幾つかあるわけですね。研究に関する事項というのは、各教員の研究活動を促進してその成果を教育に反映させる、これはそのとおりでありますけれども、そのほかぽつぽつとキーワードを拾っていきますと、例えば研究費助成、補助金の獲得額をもっと増やさなければいけないとか、そもそも各学校の先生方が研究しておられることを知的資産という形でプールをされる。それから、国立高専の専門的知的財産という形でそれが具体的に形成をされる。地域あるいは企業にはそれを取り込みたいというニーズがある。それに対して高専が持つておられる、これは普通に言いますとシーズですね、シーズとニーズをどのようにマッチングさせるかということが原則になる。シーズというのは、もっと分かりやすく言いますと手持ちのカードになるわけです。これをどうマッチングさせるか。そういったことが以下いろいろ書いてあります。

地域で開催される交流会とか、地域のニーズをどうやって探るか云々と具体的に書いてあるわけでありまして、これに関して、私は銀行屋ではなくて、富山第一銀行奨学財団という財団を銀行は持つており、そこの理事長としてこの席に座っていると思っておりますけれども、実は石原先生は私どもの奨学財団の評議員をしてもらっていますから手の内は全部ご存知なわけです。遠藤先生も同様で、皆さん財団のことをご存じですから言えますが、研究費を出す方の立場からすれば、例えば財団というのは、金持ちか貧乏であるかは別にして、1年で財産を全部研究費に出して解散してもいいと言いましたら、多分皆さん方が腰を抜かされるほどのお金を出すことができます。しかし、1年で財団を解散することが是か非かというのは別であります。

なぜそんなことを言うかと言いますと、今少し伏線的なお話をしましたが、学校が持つておられる知的財産そもそもがどんなものであるか。これをいかに企業もしくは地域のニーズに対して、それをそのまま公開するといっても、いずれは出されるだろうと思っておりますけれども、いかにしてそのような機能を持つかが課題だと思います。

私どもの奨学財団というのは、毎年ある一定の先生方に対して研究費を出す。今年度で申しますと、例えばこちらにいらっしゃる富山大学には10名の研究員に対して助成金を出した。県立大学には7名、富山国際大学には7名、高等専門学校には5名の先生方に研究費を出した。

何が言いたいかと言いますと、富山大学は総合大学ですから、どの学部のどの先生に対

して研究費を出したかということになるわけです。ぱっと見ますと、例えば理工学部の先生方には3名出した。人文科学学部の先生には1人出した。経済学部の先生には1人出した。人間発達科学部の先生には1人出した。今年は薬学関係の先生に4人出しましたけれども、去年は医学関係の先生に出した。これは一年一年違います。この中には、文化系の先生もおられるし理科系の先生方もおられる。ここが大きな問題でありまして、先ほど高専の話聞いておりましたら、高専には工学系と人文社会系と商船系と3つあって、その3つの系統に対してどのように交流するか、これは学内の問題です、そんなことを言われたはずであります。ですから先ほど私、知的財産云々はどうストックされていると言いましたけれども、これは理科系、文化系でもって、そもそも根本的に違います。それに対して研究費だとか何かをいかに外部から獲得するかということになると、ものすごく本質的な問題がある。

1つ本質的な話をさせてもらいたいと思います。7月24日に私どもの銀行で、ある有名な人を講師に呼んで講演会を開きました。人がたくさん集まりました。誰を呼んだかといいますと、かの有名なトヨタ自動車の前社長に講師に来てもらいました。トヨタ自動車の前社長といいましたら本当に大変な人です。トヨタ自動車が最高の利益を上げたときの社長であり、最悪の赤字も出した一人で、トヨタ自動車のピークからどん底までのときに社長をやった渡辺さんという人です。いろいろなことを言ってくれました。

何を言ったかと申しますと、その話がメインではありませんが、トヨタ自動車がビジネスマッチングを開くという話です。目的はあまりはっきり言われませんが、これは私の推測で言えますけれども、それに対しては、例えば富山県であれば新世紀産業機構、富山県知事も乗り込んできました。そのビジネスマッチングに富山の企業が43社参加をした。私がしたい話は、渡辺さんは恐ろしいリストを持っているのということです。何かといいますと、富山の企業で、いろいろなものについての売り上げが全国で30%以上のシェアの企業のリストを持っている。とてつもない、こんなものと思うようなものがずっと載った企業のリストを持っているのです。

何で持っているかといいますと、トヨタ自動車はいろんなテーマを持って、新しい自動車を開発するために、ありとあらゆる技術、物の考え方をマッチングして取り込もうとしている。

渡辺前社長はおもしろいことに、メーカーにはサプライヤーということがあります。サプライヤーというのは下請で物を調達するのですけれども、トヨタはサプライヤーではな

くてパートナーを探している。そこで、富山大学も実はマッチングに入っているというのです。県立大学と高専はマッチングに行かれたかどうか不明ですが。

渡辺さんというのは購買を担当して、いろんな借金をやりましたけれども、社長になった大変な実力者です。物を買いつけるという畑でトヨタ自動車です。やってきた人ですが、ビジネスマッチングはトヨタ自動車が主体でやるのですけれども、目的は私の推定ですと、もう狙いは電気自動車ではありません。電池自動車を狙って、そのためにありとあらゆる関係ないと思われるようないろんな技術をみんな取り込んでパートナーとしてというのが本音なのです。

そこで、富山大学もマッチングの中に入ると。結局、大学、高専も同じことですが、持っている知的財産、これはものづくりではなくて物の考え方もマッチングさせたいと。そこがトヨタの偉いところです。

トヨタというのは大変な合理主義者でありまして、我々には乾いた雑巾をもう一回絞ると言います。ものすごい合理主義者です。合理主義者ですから、物の考え方もマッチングで取り込みたいと。実際、物を作る技術も取り込みたい。本音は言いませんけれども、私はリチウム自動車の開発であろうと思います。そういうものを明日と明後日トヨタでマッチングすると。43社富山から来るのだそうですけれども、富山大学も入っている。

そこで渡辺さんが言ったのは、言うなればビジネスマッチングかもしれません。キーワードはコーディネート能力だと言うのです。ですから、交流会だとかいろんなものに参加をされる。

そのコーディネート役をやるのが実は決定的な点です。企業にコーディネーターがなくて適当にビジネスマッチングをやれと言ってもだめです。私ども銀行は、福井銀行と北國銀行と私どもの3行で、「FITネット」と言うのですけれども、ビジネスマッチングでは地方の銀行で最も古い歴史を持っているのですが、だめなのです。コーディネーター役がないわけです。ただいっぱい集めて何とかニーズとシーズをぶつけろと言っても、そんなものではないと思います。

ただ、トヨタの場合は、トヨタ自動車が大変な情熱を持っている。私は渡辺さんに商社をかましているかと聞きました。商社は儲かるマッチングにしか入ってこない。私は、銀行のビジネスマッチングでも商社はだめだと考えます。誰がそのコーディネート役をやるかというところがキーなのだろうと考えます。

研究開発について、そんなことも含めて研究費をどうするなり見直すなりということに

なりますけれども、交流会とかいろんなことが書いてある中で、実はコーディネーターが大事。それで私は渡辺さんに商社をかませないのかと言いましたら、ちょっと本音を言いました。豊田通商というトヨタ自動車系の商社があります。豊田通商をかますのだと言いました。

何しろ大変エネルギッシュな方です。今年の6月まで経団連の副会長をやっていた人ですけれども、一応相談役になりましたけれども、ずっとトヨタを引っ張ってきた人で、まだ現役だと思いました。

やはりいろんなことでマッチングをするときに、大学もちゃんと呼んで、富山では新世紀産業機構が一応コーディネーターで、石井知事も先頭になって乗り込んでいったのですが、それはトヨタに大変な情熱があるからそういうマッチングができるのであって、通常はなかなかできない。

もちろん、高専はいろんな研究をされて、知的財産を貯えられている。それがどう活用されるかというのは、これはマッチングの場合ですが、関係ないと思うようなものも結びつく場合がある。例えばトヨタが、富山の会社で何とかの売り上げのシェアが35%だとかそういうもののリストを持っていて私に見せて、「金岡さん、この中に取引先がある？」みたいなことを言う。私は、ビジネスマッチングと言ったらちょっとレベルが低くなりますけれども、要するに、どこかが持っている知的財産をどこでどうつなぐかというのは、誰か仲介役が必要で、それを大学や高専がやるのはものすごいエネルギーが要るだろうと思う。これが現実だろうと。

地方銀行なんていうのは知恵は何にもないですよ。3つの銀行が組んで北陸3県で、全国的には有名なFITネットというビジネスマッチングなのです。普通は県をまたがっている地方銀行というのはみんな仲はよくないので、それがマッチングをやるということはないのですけれどもやっています。ただ集めてブースを使ってどうだというのはマッチングになることは非常に少ない。やはりコーディネーターというものが必要。そういう機能を持ち、より良くしながら、いろんな研究費用をたくさん取り込む。それでいろんな研究をやる。

冒頭言いましたように、研究費を出す方の立場からすると、まずは文化系と理科系のどちらにしようかなど悩むのですけれども、文化系においてもそれはそれなりの理由がある。

私どもの奨学財団では毎年、前年奨学金を出した一部の先生方の研究成果発表会というのを開いております、今年も7月9日に開いたのですが、それは前年私どもが奨学金を

出した先生です。国立高専では有機太陽電池の変換効率向上に向けたナノインプリント技術の応用。私、とても興味がありましたけれども、私の文化系のこてこての頭ではとても理解できませんでしたがけれども、もう1つ、北陸地方の繊維産業の競争力に関する取組み、これも高専の先生で、文化系でありましてそういうことに対する研究というのは非常にマッチングの対象になるのです。

渡辺さんは、作った物だけではなくて考え方も実は欲しいのだと言いました。私はさすがにトヨタだなと思います。物の考え方が仕組みということになるのです。それもトヨタのパートナーになってほしいのだという。トヨタの偉いところは、物だけ見ているのではなくて、そういう仕組みみたいなものも含めて一緒にやりたいと言う。これも知的財産の中で大きなものであろうと思います。

私の個人的な意見ですからご参考になるかどうか分かりませんが、これは現実そのものだと思いました。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

全くご指摘のとおりだと思います。コーディネーターとおっしゃいましたけれども、コーディネーター機能を持っている人が日本社会、特に大学にどれだけいるかが問われています。コーディネーターというのは、あらゆることを知り尽くしながらやらないと、単なる研究者はコーディネーターになり得ないと思っているので、難しいですね。日本はそういう教育の仕方をしていないと思う。金岡さんのところとか、企業の方はまた、大きな企業は専門を回ることによっていろいろ……この話をし出すと長くなりますのでやめます。金岡様から貴重な意見をいただきまして、理系、文系を問わず奨学財団にはご支援いただいて、我々も支援いただいていますけれども、大変ありがたいことだと思っています。またよろしくお願ひしたいと思ひますし、貴重なご意見ありがとうございます。

「社会との連携、国際交流等に関する事項」につきまして、ご説明をお願いします。

【石原校長】 同じく19ページに社会との連携、国際交流に関して書いておりますが、一番下の欄の②、教員のシーズ、先ほどちょっとお話があったようなことを私どもも地域の方に広報したいということで、その右側の列にありますように、教員それぞれの研究テーマや考え方をデータにしたものを今年作成して、それを地域企業様に持っていこうと思っております。

20ページ目を見ていただきますと、いろいろ上から書いております。

左の列を見ていただきますと、③④、そういった事業を展開しております。それから⑤

もあります。

特に一番下の⑦ですが、今年は特に海外インターンシップ制度等の充実に取り組んでまいっておりますし、これからもやりたいと思っております。具体的に言いますと、いろんな海外の企業様の工場へ本校の学生をインターンシップで教育していただくと。逆に向こうからこちらに来ていただくことも考えている。そういったことで海外展開を考えている状況です。

先ほどもお話がありましたように、違った場所へ行くことによって人間は自然に、刺激を受けて普段自分で勉強して得られないものがいっきに身につくことが、不思議ですが、ありますので、そういったことをちょっと期待して展開しております。

簡単ですが、以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

この点に関しては、高専は着実にステップアップしていると感じております。本当にすばらしいことだと思います。

これに関しまして、正橋委員と浜屋委員からコメントをいただきたいと思っております。

【正橋委員】 日ごろからお世話になりまして、ありがとうございます。

海外の関係では、当社の方も非常にいい経験をさせていただいているかなと思っております。

まさに今グローバル化というのがこのところ広がっていきまして、特に我々マレーシアに企業、会社を作っております、よくよく調べてみると、日本から1,000社以上ぐらいの企業がマレーシアの中にあるというお話もあるので、逆に日本への留学生、マレーシアの留学生も非常に増えてきていると聞いております。

御校でもマレーシアからの留学生が何名かいらっしゃるかと思うのですが、実は先日、東京でマレーシア人留学生専門の企業説明会といいますか就職説明会の場がありました。高専出身の方と出会うことはできなかったのですが、富山から東京の留学生の集まる場に二十数名ぐらい参加されました。

一応全国から集まってくる中で200名ぐらい参加されたのですが、富山県からその1割ぐらいが参加されたということで、県内にいると留学生が就職場をなかなか見つけられないでいらっしゃるのかなと思います。結局、東京等に行つて場を見つけるということがありましたので、多分ここを出られた後にまた別の大学の3年生に編入されるという流れがあると思うのですが、より富山の企業とかをアピールできるような仕組みができていくと、

また戻ってきていただくというか、我々にとっても非常にいい環境ができ上がるのではないかなと思っております。

あと、今の金岡様のお話にもありましたけれども、シーズ集をどうやって企業側とマッチングしていけるのかが非常に難しいところなのかなと思います。ただ、もともと先生方がいろんなテーマを持たれること自体には予算や資金みたいなところが絡んでくるところもあると思いますので、そういうのも含めて企業側が、まさにおっしゃったようにコーディネートをどのようにやっていけばいいのか、高専側もどのようにやられるのかということところがとても気になる場所だと思います。

どうしても冊子だけですと、それが直接的につながるとはあまり思えないので、より具体的に企業側に対しても攻めていくとか、そういう動きがあると結果が出るのではないかなと考えております。

以上です。

【浜屋委員（代理）】 私の方から2点だけ感想を述べさせていただきたいと思います。

私の会社は初めて、先日行われました課題解決力育成講座に出させていただきました、2年目の社員に参加させたのですけれども、帰ってきてすぐレポートを書いています、チームで意見を考える場合に役立つ手法を学んだということです。

非常に社会貢献といいますか、我々はなかなか、こういう個人に対しての研修というのはできないのですけれども、そういうものに参加して、チームでやる場合にはチームで話していかなければならないということを感じて、これからの活躍も期待しているわけです。

もう1つは、ずっと継続して行っておられます海外のショートステイです。こちらの発表は去年聞かせていただきましたけれども、ショートステイの割には、生徒が各外国語で研修成果をスピーチされていて非常にすごいなと思ったのですけれども、そういうものを継続していただいて、国際に通じる人材の育成を引き続きやっていただければと思います。

以上です。

【遠藤議長】 いかがでしょうか。

【石原校長】 どうもありがとうございます。

おっしゃったように、幾つかお話がありましたシーズ集を作るだけではだめで、それはある意味でこういう製品としてこういうのを作りませんかという、具体的にもっと目に見

える形で呼びかけることが必要だということで、それは先ほどのコーディネーターにもつながる話かなと思って聞いておりました。それはありがとうございました。そのような方向で考えていきたいと思えます。

問題解決力やショートステイに関しては、私どもこれからますます取り組む必要があると思っておりますが、高専の学生の発表、プレゼンの能力は結構高いと思っております。私もいろいろなところへ出て聞いていますけれども、そういう点で比較して高いと思えます。それをますます高めていく必要があるかなと思っております。ぜひ今後の方向として進めていきたいと思っております。

どうもありがとうございます。

【遠藤議長】 シニアフェローという形がどんどん増えてきていて、その方々はコーディネーター的な役割も当然されているという形になるのでしょうか。

【丁子副校長】 特に教育関係でご貢献いただいておりますけれども、実際の研究関係の方はまだちょっと。

【遠藤議長】 企業の方が多いですよね。

【丁子副校長】 ほとんど企業の方です。

【遠藤議長】 企業の方がそれでマッチングとかということにつながっているものでしょうか。

【丁子副校長】 はい。

【遠藤議長】 分かりました。その辺からも窓口になるのかなと思えました。ただ、企業ごとの利害とかいろんなことがあるかもしれませんね。

【丁子副校長】 シーズ、ニーズについて簡単に一言だけ。

本校にイノベーションセンターというセンターがありまして、そこが中心となって、技術振興会の会員企業様といろいろ交流、研究会を催したり何かして、それをここでやろうとしておりますけれども、言われるようなところまでまだちょっと至っていませんので、まだ努力が必要だと思えます。

【遠藤議長】 それは我々共通の悩みだと思うのですが、それだけでは絶対に結びつかない。県立大学はいろんな研究テーマでディスカッションされて積み上げていらっしゃると思えますけれども、本当につなぐ人がどうやってつなぐかというのは、シーズとニーズの大事な形ですね。これは本当に基本的な課題だと思っておりますが、またいろいろ進めていただきたいと思えます。

でも、インターナショナルな活動は学生にすごい刺激が入っているのだろうと改めて拝聴いたしました。

ありがとうございました。

それでは、以降、管理運営に関することと、予算関係、業務予算、諸々ありますが、まとめてご説明いただけますでしょうか。

【石原校長】 21ページ目にあります4、管理運営に関する内容です。

本校には、方針を決める会議としまして戦略企画会議というのがあります。それを運営審議会というところで意思決定を行って、それを教員会議等で全員に周知していくというプロセスをたどってやっております。基本的には、結構校長の方針、リーダーシップが強いという状況でやっております。それが①です。

②としましては、いろいろ外部の有識者ということで、今回の運営諮問会議等も開催しながら、外部のご意見を参照してご意見をいただきながら改善をしていくと。

そのほかに、実は東海・北陸地区に8高専というのがありまして、8高専の校長会議。それから、日本海近辺、京都、福井、富山とありますが、そこに中部日本海高専会議。商船学校で全国で5つの商船高専がありまして、その会議があります。そういったところをいろいろやりまして、外部の意見を取り込みながら、現在そういった管理運営に関する改善を行ってきているという状況です。

22ページ目をご覧くださいますと、③に会計システムのご紹介をしております。

④が事務職員、技術職員の研修会の参加ということ。

⑤が事務職員の資質向上のために、人事交流を特に富山大学と行っております。

そういったことが管理運営に関することです。

23ページ、その他ですが、平成21年に高専が統合して新しく富山高専になったわけですが、来年度で完成の時期を迎えます。それにあわせて、例えば新しい専攻科を平成27年度から立ち上げないといけないということ。そういった問題等について今準備をしています。

また、専任教員等が地域人材開発本部等におりますので、その先生方と本科の教員との交流をどのようにしていくかがこれから重要な話になってまいります。

23ページのⅡ、黄色でマークしておりますが、業務運営の効率化に関する目標云々とあります。これは全て大学等も同じですが、私ども高専におきましても教育・研究の費用が毎年1%ずつ効率化ということで縮減している。管理関係では3%ずつ下がっているとい

うことで、平均すると2%ぐらい下がっているという非常に厳しい状況があります。

それに加えて、実は改組によって、従前8学科だったものが今6学科体制に向かっていますので、その分の経費削減が続いています。

冒頭にちょっとお話しさせていただきましたように、今年は学生の定員割れがあったということで、それも予算削減ということでもなかなか厳しい状況です。

私、③の予算の関係の話に既に入っておりますが、そういう厳しい状況の中で、ただ、いかにして教員が意欲を持って取り組んでもらうかということで、③の平成24年度の計画の実施状況で、そこに書いてありますような努力を行ったということを書かせていただいております。

そういったことで、外部資金等をもう少し求めざるを得ない方向に来ているわけです。以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

私がこのところのコメント担当なのですが、特段ありません。今の厳しい日本の社会状況からいろんなひずみを受けまして、教育界といいますか研究・教育も全てだと思えますけれども、やはり厳しいですね。ここでブレークスルーをどうするのかということが課題だろうと存じます。

その中で、高専機構という一つの大きな全国機構の中でそれぞれ動いている流れですよ。この辺は、大学側から見ると非常に明確に動いているように見えます。1つの方向性で、何か絞り込みながら、国は何かを考えながらやっているというふうに、何かと言われるとちょっと明確ではないのですけれども、そう見えます。それは逆に言うと、前から言っていますけれども、国は国立大学以上に高専をバックアップしている。実はひがんでおります（笑）。いい形で進めていただきたいと存じます。

予算の厳しさはありますけれども、しっかりした管理体制でやっていただきたいと存じます。

何と云っても、先ほど教員の選考云々のところでおっしゃいましたけれども、高専が全体として1つの方針をお持ちになられて、予算を運用されていますし運営もされているのを改めて感じておりますし、そのよさを発揮していいものを作っていただきたいというのが感想です。また協力できるところは協力し合いながらやってまいりたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと存じます。

[2] その他

【遠藤議長】 大幅に時間が超過しておりますが、24年度計画実施状況及び25年度計画全般についての追加のご意見、ご質問がありましたらお願いしたいと存じます。

【本望委員】 1点お願いなのですが、1番目の「入学者の確保」という部分で、この中のどこに入るのが適当か分かりませんが、日本船主協会という船会社の集まりの団体がありまして、ここが5年間にわたって高専の学生募集のために、高専の商船学科ですけれども、自らの予算と労力によってずっと募集活動を続けてきているわけです。「合同進学ガイダンス」という名前のもとに毎年これを実施してきているということで、当然、富山高専もその中の一員として動いてきているわけですが、これによって全国的に商船学科の学生募集にかなりの効果を上げてきたといえますか、商船学科の学生の入学に対する理解が深まるし、全国的に5校あるのですが、進学希望者が増えて倍率も上がってきているということで、各校とも現在2倍近く、当初は定員割れしているような状態でしたが、そういう活動をされているということもありますので、この中にそういうことも追加していただけないかということなのですが。もしよろしければ、私、そのチラシを今持ってきているのですが。

【石原校長】 実は既に私ども商船系でそういう話を5商船の校長会議で実施しております、実際そのように動いておりますので、ここには書いておりませんが実質的にはやっております。

【遠藤議長】 ぜひそれは検討いただいて、よいものという意味でよろしく願いいたします。

ほかにいかがでしょうか。

最終的に、25年度の中期計画というのは今年で終わりですか。

【石原校長】 今年度で終わりです。

【遠藤議長】 来年度には新しい5カ年計画がまた始まると。5カ年でしたよね。

【石原校長】 5カ年です。

【遠藤議長】 そのプランニングに関してはもう着手されているわけですか。これは高専機構全体としての長期計画ができてきて、それをベースに各機構が決めるというプロセスですか。

【石原校長】 基本的にはそうだと思います。高専機構全体としてある程度のベクト

ルの方向を決めて、それに大体対応するような形で高専が細部を決めていくという。

【遠藤議長】 そうすると、今年中にある一定の評価がなされ、それをベースにしつつ、今度来年からの中期計画を考えるという話になるということですね。分かりました。

それでは、質疑に関しましてはここで終わらせていただきたいと存じます。

もし抜けている点がありましたらご指摘下さい。大丈夫でしょうか。

それでは、議事の部分は終了させていただきたいと存じます。

議長の不手際で時間が過ぎましたことをお詫びいたします。

4. 閉会挨拶

【林事務部長】 長時間にわたりご審議、また貴重な意見を活発に出していただきまして、ありがとうございました。

以上をもちまして、平成25年度第1回富山高等専門学校運営諮問会議を終了いたします。

閉会に当たりまして、本校の石原校長からご挨拶申し上げます。

【石原校長】 本日は長い時間にわたり貴重なご意見を賜りまして、本当に感謝申し上げます。

いただいたご意見は、私ども次の第3期中期計画等に向けて、また我々が困っている方向の解決の方法として、何が足りないのかということに対して非常に参考になりました。

どうもありがとうございました。

〔閉会 午後0時26分〕